

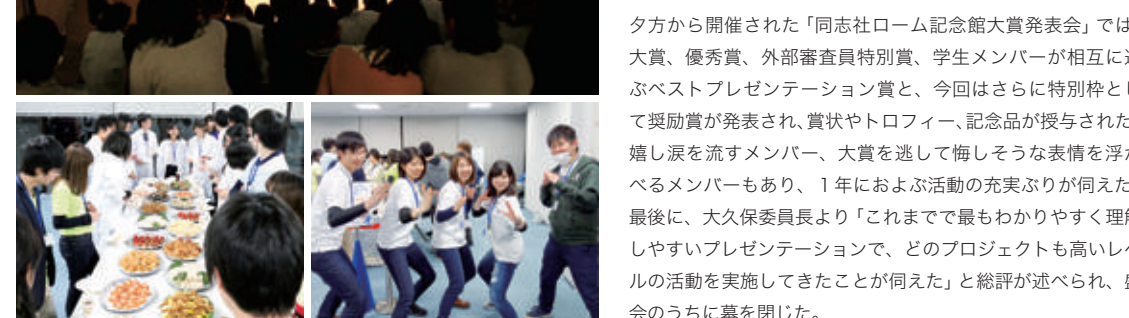


## 2016年度 最終成果報告会・同志社ローム記念館大賞発表会

2017年3月4日(土)、同志社ローム記念館劇場空間において第13期プロジェクトの1年間の集大成となる最終成果報告会が開催された。報告会を運営するのは「スタジオZero」。プロジェクト活動をサポートする立場の彼らは、最高の発表の場を提供すべく、司会や機材操作、舞台装飾をはじめとするステージの演出を約3ヶ月かけ準備し、入念なリハーサルを重ねてこの日に臨んだ。



前半は各チーム13分間のプレゼンテーションと5分間の質疑応答。1年間の活動過程と成果を十分に伝えるため、動画や演出に力を入れるなど、どのチームも工夫を凝らし、熱のこもった発表となった。続く後半には会場を移し、活動内容や成果物が展示された各プロジェクトのブースを巡ってメンバーに質疑を行う質問タイムが設けられた。スマートフォン用アプリやロボット、動画作品など完成度の高い成果物に、立ち寄った審査員や他のプロジェクトメンバーから様々な質問が寄せられ、熱心に答えるメンバーの姿が見られた。賞の選考が行われている間、メンバーは「テレビ番組」をテーマに開催された交流会に参加。キャスターに扮したメンバーが、1年間を振り返るクイズをはじめ、お天気、占いなどの楽しいコーナー企画を進行し、緊張のほぐれた会場では大きな笑いが起こった。



夕方から開催された「同志社ローム記念館大賞発表会」では、大賞、優秀賞、外部審査員特別賞、学生メンバーが相互に選ぶベストプレゼンテーション賞と、今回はさらに特別枠として奨励賞が発表され、賞状やトロフィー、記念品が授与された。嬉し涙を流すメンバー、大賞を逃して悔しそうな表情を浮かべるメンバーもあり、1年におよぶ活動の充実ぶりが伺えた。最後に、大久保委員長より「これまでで最もわかりやすく理解しやすいプレゼンテーションで、どのプロジェクトも高いレベルの活動を実施してきたことが伺えた」と総評が述べられ、盛会のうちに幕を閉じた。



同志社ローム記念館大賞

トロフィー・賞状・副賞(賞金5万円・記念品)

ベストプレゼンテーション賞 (学生メンバー相互評価)

賞状・副賞(記念品)

## スタディドット VR

- プロジェクトリーダー  
竹永 勇真 (同志社大学理工学部2年)
- プロジェクト責任者  
大久保 雅史 (同志社大学理工学部教授)
- メンバー数 20名



### <授賞理由>

VRを表現方法のひとつとして取り入れたゲーミフィケーションを完成度の高いアプリケーションとして実現したことは高く評価できる。また、チームワークの良さを感じさせる、工夫されたプレゼンテーションも好評価であった。開発されたアプリケーションもリリースのみに留まることなく、体験会などを通して改良を試みるなど、プロジェクトの取組みにも強い熱意を示し、活動全体として審査員の高い評価を得た。



同志社ローム記念館大賞 優秀賞

トロフィー・賞状・副賞(賞金2万円・記念品)

## ROBOX

- プロジェクトリーダー  
米田 浩崇 (同志社大学理工学部2年)
- プロジェクト責任者  
橋本 雅文 (同志社大学理工学部教授)
- 参加団体  
けいはんなジュニアロボットクラブ
- メンバー数 9名

### <授賞理由>

市場でも流通している部品を使用しながらも完成度の高いすぐにも販売できうる成果物を生み出した点が最も評価できる点である。成果物の開発においてやらねばならないことをすべて実現できたことが成果物の完成度につながり、それが審査員からの高評価獲得につながった。また、成果物そのものだけではなく、教室参加者のプログラミング能力の向上にも目が向けられていたことも評価できる。この授賞を糧に今後も質の高いプロジェクトの企画、実施に励んでもらいたい。



### 外部審査員特別賞

賞状・副賞(記念品)

## たびプロ〜木津川市プロデュースプロジェクト〜

- プロジェクトリーダー  
横山 諒 (同志社大学理工学部4年)
- プロジェクト責任者  
飛龍 志津子 (同志社大学生命医科学部准教授)
- 参加団体  
特定非営利活動法人プロデュース・テクノロジー開発センター  
木津川市教育委員会
- メンバー数 23名

### <授賞理由>

メンバー全員が何度も木津川市を訪れ、まちの中に積極的に溶け込み多くの市民と触れあう中で、木津川市の魅力をいかに発信するか考え、企画を組み立てた。その結果として食と体験をテーマとした「1日周遊コース」が生まれ、バスの中での土産販売のアイデアもユニークであった。また、ドローンによる空撮映像を使って木津川の自然、文化、歴史をうまく伝えられていた。また、単に観光客を増やすと言った数値目標ではなく、「市民がわがまち木津川を誇りに思ってもらおう」ことを最終目標に掲げた点も高く評価できる。



### 奨励賞

賞状・副賞(記念品)

## スタジオZero

- プロジェクトリーダー  
水本 輝寿 (同志社大学理工学部2年)
- メンバー数 52名

### <授賞理由>

昨年3月から、本日3月4日の朝まで、笑顔の影に胃の痛み思いの毎日だっただろう。その熱い気持ちを持続しつつ、実際のサポートを事務局スタッフとともにやってきたことが、各チームに伝わっていることが見てきた。  
定例の総会、スキルアップのためのサポート企画、8月のステップアップキャンプの実施、広報誌ippoの編集、そして本日の各チームのプレゼンテーション力のアップに大きく貢献した事を鑑み、平素は「縁の下の力持ち」という立場ではあるものの、今回表舞台にて賞を贈呈したい。